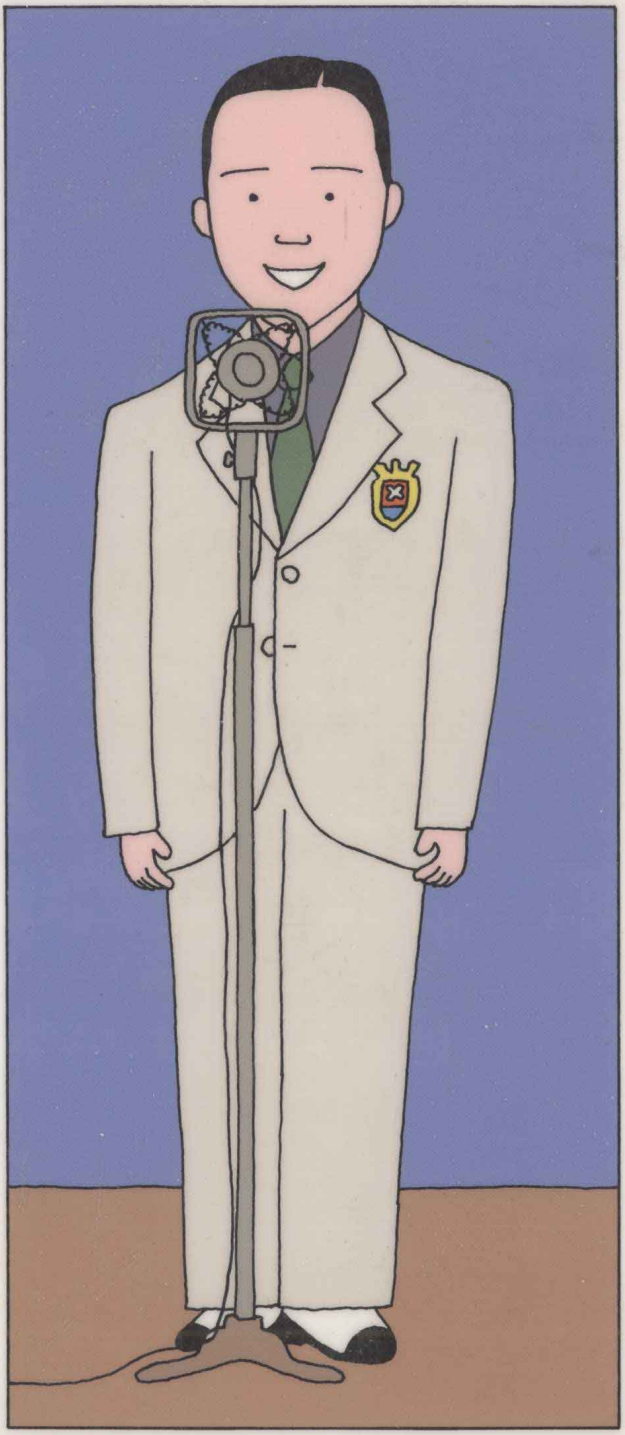
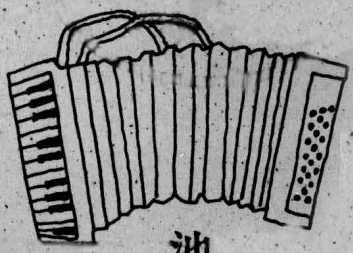
藤山一郎とその時代

池井優



藤山一郎とその時代

江苏工业学院图书馆
藏书章



池井優

新潮社

池井優　昭和10(1935)年、東京生れ。現在、慶應義塾大学教授。専門は日本外交史。野球好き、特にアメリカの大リーグ通として知られる。著書に『白球太平洋を渡る』『東京六大学野球外史』『野球と日本人』等がある。

藤山一郎とその時代

発行――一九九七年五月二五日

著者――池井優

発行者――佐藤隆信

発行所――株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一

電話――編集部（〇三）三二六六―五四一一
読者係（〇三）三二六六―五一一一

振替――〇〇一四〇―五―八〇八

印刷所――錦明印刷株式会社

製本所――大口製本印刷株式会社

© Masaru Ikei 1997 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料は小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-417901-9　C0073

藤山一郎とその時代——目次

プロローグ——急逝　7

1　第一の母校・慶應　10
日本橋の少年　岡本太郎と幼稚舎で　関東大震災　若き血に　ビリから二番目の卒業

2　音楽学校の青春　38
入学試験　予科は三〇人中一五番　「ちょっと銭湯へ」　写譜や吹き込みのアルバイト

3　歌手「藤山一郎」の誕生——「酒は涙か溜息か」　52
暗い世相　一〇〇万枚の大ヒット　著作権論争　停学を命ず　歌謡曲もクラシックも　卒業そしてビクターへ

4　テイチク時代——「東京ラプソディー」　76
帝国蓄音機株式会社　再び古賀政男と　銀座・神田・浅草・新宿　録音技師の青年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

5 戦争そして軍歌 94
国策に沿って　山内中尉の母　結婚　コロムビアへ復帰　太平洋戦争勃発
6 南方へ 109
東京ラグラグ会　社会的地位は保障せず　南方の藤山慰問団　再度南方へ
最前線の島で
7 収容所のアコーディオン 130
降伏　収容所を転々と　イギリス軍将兵のために　三年ぶりの帰国
8 荒野にひびけ――「長崎の鐘」 147
戦地帰還第一声　永井隆博士　発熱をおして　病床の博士を前に
9 若く明るい歌声に――「青い山脈」 169
戦後の解放感　服部良一と今井正の対立　日本人の最も好む曲
10 四三回の紅白 181
正月の単発番組　トリなのに一番しか歌えず　「私の大晦日」

11 流行歌への疑問 194
森繁久彌と組む　NHKの嘱託へ　歌手協会会長　コマーシャルソング
12 奉仕の精神をいかす 213
ボーイスカウトと歌と　ロータリアンとして　トランジスタ娘に歌唱指導
13 日本の自動車史を生きる 228
小学生の車庫入れ　若き日の本田宗一郎と　家に三台　ダットサンを改造
14 最後の作曲 239
車椅子で国民栄誉賞　死の五日前に
エピローグ——冨士霊園 249
あとがき 252
主要参考文献一覧 257

藤山一郎とその時代

装幀——和田　誠

プロローグ——急逝

この日は暑かった。気温は三〇度をこえ、アスファルトの照り返しが喪服姿で献花の順番を待つ人々の下着を汗でぬらしていた。

平成五年（一九九三年）八月二四日、八二歳で亡くなった藤山一郎の葬儀が東京都目黒区中町の自宅で営まれていた。戦前、戦中、戦後とヒット曲を出し続けた歌手だけに、田園調布、あるいは成城にあるような、高台にあって広々とした芝生の庭を持つ豪邸を想像するが、目黒通りから奥に入った、同じ通りに理髪店もある普通の家である。

「天竜下れば」の市丸、「夜のプラットホーム」の二葉あき子、「白い花の咲く頃」の岡本敦郎のようなベテランから、畠山みどり・都はるみ・平尾昌晃・森進一などの歌手、森繁久彌などの俳優、またレコード会社やＮＨＫをはじめとする放送局関係者、ロータリークラブで付き合いのあった財界人、職場のコーラス指導を受けた人々やゴルフ仲間、近所の主婦……。故人の活動の広さと人柄を反映し、多方面から多くの人々が最後の別れを告げにやってきていた。

広間の祭壇には中央にボーイスカウトのきじ章を肩から下げた大きな遺影がかざられ、その前に国民栄誉賞と紫綬褒章をはじめ各種の勲章が置かれている。無宗教方式とあって、僧侶の読経

も牧師の姿もない。「影を慕いて」など、故人のヒット曲が静かに流れる中、約一〇〇〇人の弔問客が白いカーネーションを献げ、故人の意思により弔辞もなく、式は簡素に進められた。

一時半から始まった告別式は、三時頃終了。やがて棺が玄関から出てきた。玄関前の道路上で準備をしていた慶應義塾応援指導部のブラスバンドが、出棺を送るための曲をかなでる。藤山一郎がかつて作曲し、慶應に贈った「慶應ワルツ」「三色旗の下に」「躍る太陽」である。本来神宮球場などで響きわたる応援の曲なのだが、この日は、音をおさえ、テンポをスローにして、故人を送るにふさわしいスタイルとした。参列者と多数の報道陣が見送る中、霊柩車は静かに出発。車はすぐ目黒通りに出ず、昭和一一年以来住み馴れた中町の町内をコの字型に回り、町内の人々の見送りを受け、火葬場へと向った。

藤山一郎が亡くなったのは、八月二一日午前四時過ぎであった。亡くなる前日の八月二〇日には、東京西ロータリークラブの例会に出席、出席者の一人と天ぷらを食べに行く約束までしていた。また一九日は娘夫婦と埼玉県の霞ヶ関カントリークラブに一年ぶりに出向き、いく夫人とは三年前に迎えた金婚式のお祝いを改めてしようと話していたばかりであった。

二〇日の午後二時過ぎに自宅に帰宅。おやつも食べ夕食も普通どおりに済ませた。晩年、腰痛の持病があり、二〇日の夜は「腰が痛い」と、夫人のマッサージを受けて早くやすんだ。

二一日、午前三時過ぎ「いたい」と大きな声をあげた。いく夫人と同居している一人娘のたい子が医師を呼んだが、間もなく眠るように亡くなった。

「ピアノをガーンと弾いてピタッととまるような死に方をしたい。ぐずぐずしているのはいやだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

腰痛に耐えながら藤山はそう話していたという。歌う姿勢そのままの死と向い合う言葉だったのかもしれない。

藤山は人一倍恵まれた声帯を持っていた。音声言語医学者として著名であった颯田琴次博士がモデルに使って学会報告をしたほどである。主治医の法水正文博士は藤山から万一の場合は医学上の参考にするための声帯の臓器提供の約束を取り付けていたのだが、病院でなく自宅で亡くなったため、死後の時間が経過し、実現には至らなかったという。

歌声の消える泪や天の川　西澤實

さわやかに歌い続けて八二歳藤山一郎逝ける夏の日　鐘ヶ江達夫

藤山一郎は明治という時代も残りあと一年という明治四四年（一九一一年）に生を受け、満州事変の始まった昭和六年（一九三一年）に「キャンプ小唄」「酒は涙か溜息か」でデビュー。戦時中は、戦時歌謡を歌い、軍のために南方の島々を慰問。終戦後、その南方の島で収容所生活をおくり、帰国して「青い山脈」「長崎の鐘」などの大ヒット曲をとばす。しかし、歌謡曲の堕落に疑問を感じ、ＮＨＫ専属となって、ホームソングをはじめ、正しい歌、皆で歌える歌の普及に努めた。さらに、ロータリークラブやボーイスカウト活動など、昭和三〇年以降に活発となる社会奉仕は晩年まで続けられた。

「楷書の歌声」「楷書の人生」を貫いたこの藤山一郎の生涯を追うことは、大正・昭和、さらに平成と日本の歩みを追うことでもある。

1　第一の母校・慶應

日本橋の少年

手元に二枚の地図がある。一枚は『明治四〇年一月調査東京市日本橋区全図』（明治40年3月発行）、もう一枚は『東京都区分地図中央区』（平成8年4月発行）である。二枚の地図を見比べると、約九〇年の歳月を経て、いかに日本橋近辺が変化したか見てとれる。伝統ある日本橋区・京橋区をくっつけて、歴史的由来も住民感情も無視して、単に東京の中央にあるという理由だけで中央区と名付けた役人のセンスの悪さを改めて感じると同時に、この地域が関東大震災、第二次大戦による空襲、日本経済の発展などにつれて大きく変貌せざるを得なかったことに気付かされる。『日本橋区全図』を見ていくと、長谷川町・富沢町・弥生町・新大阪町・元浜町・通旅籠町（とおりはたごちょう）などの名前が見える。ここはかつて織物問屋が軒を並べていたところである。

長谷川町の一角に近江屋という唐物問屋があった。唐物とは、元来中国製品のことであるが、欧米からの輸入品のこともさした。この近江屋の主人は、竹内岩次郎、近江屋という屋号が示す

ように、近江の出身である。

江戸時代末期から明治にかけて、この地域に進出してきたのは伊勢商人に続いて近江商人であった。近江商人は早くから京都、大阪に拠点を作り江戸にも進出するようになったが、それはまず天秤棒一本を肩にかけての行商から始まった。行商といっても、近江商人のやり方は「行きに儲け、帰りに儲ける」式のものであったという。例えば、麻布・蚊帳・畳表・編笠・漆器・合薬（ごうやく）などを売りにゆき、古着・木綿・呉服などを仕入れる。売りにいく品を「下し荷」といって関東、信州、東北に運び、それらの地域から生糸・紅花・蠟・漆・豆類・麻などを仕入れ、「登せ荷」として持ち帰って売るという方法である。旅から旅へ荷を天秤棒で運ぶ姿こそ近江商人の真骨頂であった。

竹内岩次郎は、日本にペリーがやってくる前年の嘉永五年（一八五二年）、近江神崎郡能登川村の加藤幸助の次男として生れ、一六、七歳の頃奉公に出て、このような行商を経験した。その後京都の竹内房次郎の店に入り、同店が明治一七年日本橋長谷川町に支店を設けるにあたり、支配人に抜擢され、娘てる子と結婚、竹内姓を名乗った。

この竹内房次郎の東京の出店、近江屋、通称近房（きんふさ）が主に扱ったのはモスリンだった。モスリンといっても、今日では知らない人の方が多いかもしれないが、明治時代の洋反物といわれた輸入織物の代表的なものは、金巾（カナキン）（綿織物）とモスリン（毛織物）であった。モスリンはやわらかな手ざわりと、柄染めの美しさから、明治三〇年代になると、肌着、衣類などの材料として女性達の人気の的となった。当初モスリンは、ほとんどが輸入であったが、輸入が国内の市況とタイミングが合わずに入荷が行われるため、明治二二年には価格の大暴落をみたこともあった。東京のモ

スリン問屋は当時危機に瀕し、その対策として設立されたのが、問屋仲間の匿名組合「モスリン商会」である。一九軒の洋反物問屋によって作られたもので、各問屋が手持ちの色モスリンを買いとり、市況が悪化した時にモスリンの値の下支えをはかるものであった。この一九軒の中にもちろん近房も入っているし、明治二八年にモスリンの卸しを営む洋反物問屋がモスリンの国産化を目指して設立した「東京モスリン紡績株式会社」にも近房は三六五株を持つ株主として参加している。

こうして発展していく近房に京都の竹内家から七歳の時養女としてやって来たのが、後の藤山一郎の母ゆうであった。近房で育てられたゆうは、明治二七年二〇歳で近房の番頭増永信三郎と結婚、近江屋を継ぐことになる。

信三郎は元来は小学校の教師で、無口な性質。いつも和服に袴、草履ばきで、こつこつと家業に励んでいた。元教師だけあって、英語も相当にいけ、フランスの首都をパリといわず必ずパリスと最後のSを発音していたという。「英語をお教え申そうか」と話しかけたのが、信三郎のゆうに接触するきっかけであった、と後々藤山一郎は母の口から聞かされている。

信三郎、ゆうの夫婦には結婚した翌年の明治二八年に長女の恒子が生れた。恒子は東京女子学院を卒業して、結婚してアメリカに渡り永住権をとってついに彼地で生涯を終える。恒子が生れた翌々年の明治三〇年、近房の二号に男の子が誕生し、入籍して相続者となったため、ゆうは夫信三郎の増永姓を名乗ることになった。住居を富沢町に移し近房の仕事場に通うようになる。

近房は順調に発展していった。明治三一年の『東京市日本橋区商工人名』の「資産家地主総督東京編三」によると、近江屋は洋反物を扱い、売上税を一三万三〇〇〇円支払うという日本橋界

隈二四店の一つに数えられるまでにいたった。三二年、長男正夫誕生。

父親はよく符丁で商売をしていた。一から〇までを「トミハクニヲオサムル」（富は国を治む る）、一から九までを「スエヒロハアキナイ」（末広は商い）と置きかえ、しきりに「トス」とか「エミ」などといいかわしていた。すなわち言葉の順序通り、一、二、三、四とかえていけばいいわけで、「トス」は一一、「エミ」は二二という意味である。

一方母親は株に興味を持ち、同じような株をあっちに売ったかと思うとすぐその口でこっちの株を買う。そのために電話をしている姿が藤山の記憶に残っている。株の投機で大もうけをしたため、家作を次々と作り、家賃をとり、生活はきわめて楽になった。

日露戦争のうわさがちらほら聞えてきた明治三六年、蠣殻町に家を建てて増永一家は移転。この年、次男の文夫が生れた。文夫は後に東大を卒業、三井物産に勤務、藤山一郎が売れっ子になってから、海外勤務の傍ら時折後援会の雑誌『藤山』に兄として弟の想い出などを書いている。この頃、株があたり、なんと家作があちこちに四〇軒ほどできた。ゆうは、体重が七一キロもあり、酒も強く、気性は男まさりであった。明治四〇年には次女八千代が、そして四四年には三男で末っ子になる丈夫が生れた。

丈夫が誕生したのは、明治四四年（一九一一年）四月八日。この年二月、日米新通商航海条約が調印され、日本は幕末以来苦しんできた不平等条約の関税自主権の確立に成功、三月には日本最初の労働立法である工場法が公布され、七月には米国を協約の対象から除いた第三回日英同盟協約が調印、一〇月には隣国清で三〇〇年の帝政をくつがえし、中華民国が誕生するきっかけとなる辛亥革命が勃発するなど、明治末期の変革の様相が窺える年であった。

丈夫が生れた四月八日の東京朝日新聞を見ると、化粧品会社の募集した懸賞の当選文「俳優の化粧と素人の化粧に就て」の発表が載っていたり、横浜出帆米国行めきしこ丸、たこま丸、神戸出帆台湾基隆行笠戸丸、台中丸、門司経由大連行開城丸、嘉義丸、門司経由天津行大智丸、大信丸の広告が掲載され、時事新報には一龍斎貞山口演の講談が読者の関心を惹くなどの工夫がこらされている。

ちなみに、明治四四年は亥年に当り、同年生れの人々が「いのししの四四（しし）生れの集まりをつくりましょう」と昭和二八年に出来たのが「ししの会」である。メンバーは藤山のほか、古屋徳兵衛（松屋社長）、岡本太郎（芸術家）、吉村公三郎（映画監督）、森雅之（俳優）、加東大介（俳優）、長門美保（オペラ歌手）、田村泰次郎（作家）、西崎緑（舞踊家）、小田切春雄（日本航空専務）、野間省一（講談社社長）、竹中錬一（竹中工務店社長）、戸川エマ（文化学院）、岩永信吉（共同通信顧問）などである。元気な時は月一回柳橋の料亭「亀清」で例会を開き、バカ話にストレスを発散させていた。

丈夫は幼ない頃から音楽の環境には恵まれていた。特に母と長姉の存在が大きい。母ゆうは商売のカンは良かったが、音楽的な才能や知識はなく、末っ子の丈夫でさえ、子守歌を歌って貰った記憶はない。だが、主義として「お茶やお花は役に立たない。お稽古事はピアノに限る」と考えていたらしく、五人の姉弟は皆小さい時からピアノを習わされた。下町でいながら、三味線や日本舞踊でなかったのは、信三郎が花柳界に出入りすることがあり、色里に関係あるものを嫌っていたからである。長女の恒子が八棹の箪笥や長持を連ねて嫁に行く時、その行列を見ながら「無駄なことだ。八千代の時はピアノを持たせてやる」といい、その言葉通り次女は雙葉を卒業

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com